

ふちゅうカレッジ講座記録シリーズ

第 25 回府中市生涯学習フェスティバル特別講演会

なぜ私は毎年富士山に登り、 頂上で講談を語るのか

～昨年 10 回目の登頂を達成～

講師：講談師

神田 紫

府 中 市

ふちゅう生涯学習センター共同事業体

府中市生涯学習ボランティア
「悠学の会」講座記録グループ

発刊にあたって

本市と指定管理者「ふちゅう生涯学習センター共同事業体」、生涯学習ボランティア「悠学の会」は、協働により、府中市学習センターで実施した講座の中から特色ある講座を選定し、記録冊子を作成しています。

このたび、「第25回府中市生涯学習フェスティバル」の中で開催した、講師の神田紫氏による特別講演「なぜ私は毎年富士山に登り、頂上で講談を語るのか」の記録冊子を作成いたしました。

今回の特別講演では、富士山の出会いから、富士登山、富士山クラブでの自然環境保護活動、頂上での講談など様々な体験談をお話いただきました。

また、日本の伝統芸能である講談について、聞いたことがある方も初めての方も、楽しく触れることができ、貴重な体験ができたことと思います。

このような講座を記録化していく活動は、自ら学んだことや身につけた知識・技能を地域社会に活かしていく「学び返し」にもつながるものと考えております。今回の講座記録の完成は、ひとつの大きな成果であり、広く市民の皆様に活用していただければ幸いに存じます。

結びに、ご多用のところ講演ならびに原稿の校正にご協力いただきました神田紫氏、そして、講演の記録などのお手伝いをいただいた生涯学習ボランティア「悠学の会」講座記録グループの皆様から心から感謝申し上げます。

平成31年3月

府中市長 高野 律雄

「神田紫富士登山隊」の撮影した写真（行程順）

＜五合目から富士山頂上へ登る＞



「富士宮ルート」の五合目の出発点から富士山頂上を窺う（標高 2,400m）



「神田紫富士登山隊」。先頭が紫さん



登山者が連なって富士山頂を目指す



「新七合目」の山小屋の前の紫さん
(2,780m)



「元祖七合目」の山小屋
(3,010m)



登山道の急な坂道を上る。左手には登山者数をカウントするカウンタが設置



半泊する八合目の山小屋でのひととき。
美味しいカレーライスと漬物とお茶の夕食



半泊後、早朝 2 時頃、八合目から再度山頂を
目指し登山開始 (3, 350m)

<頂上>



富士山クラブ提供

富士山頂での「ご来光」とそれを拝む大勢
の登山者 (4 時 45 分頃)



富士山クラブ提供

富士山登頂記念の集合写真。標柱の左下に
黒い帽子をかぶった紫さん



約 90 分で頂上を巡る「お鉢巡り」の一部。
山頂の一部に雪渓が残っている



お鉢巡りの一部で、「剣が峰」に登る道



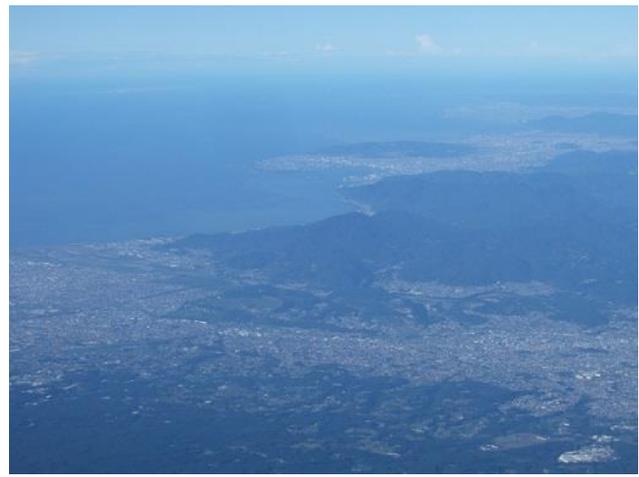
剣が峰の頂上にある富士山頂測候所跡。
最高峰で記念撮影をするための列が続く



剣が峰山頂の標柱(石碑)「日本最高峰富士山
剣ヶ峰三七七六米」。一番左が紫さん



日本一高い「富士山頂郵便局」前に立つ
紫さん。この後、郵便ポストに葉書を投函



富士山頂から臨む「三保の松原」



山頂から見える影富士
(雲海に写る富士山の影)



ブロッケン現象(御来迎)(注)
(なかなか撮影できない貴重なものです)

(注) 高山の日出・日没時に、前方の霧に背後からの陽光により自分の影が霧に投影されその周りに御来迎の様な色をついた光の環が浮かび上がる現象。



神田紫さんの富士山頂での「頂上講談」
(背景は剣が峰 標高 3,776m)



気圧が低く空気が薄い中、力を振り絞って
頂上講談中の紫さん

<富士山頂上から五合目へ下る>



湧き出る雲を眼下に見ながら隊列を組んで
下山する神田紫富士登山隊



八合目にある皇太子殿下もお泊りになられた山小屋。下山の途中、ここで朝食を取る

<その他>



富士山に登るために事前の「練習登山」の
例(高尾山)。標柱の左側2人目が紫さん



2018年7月28日(土)下山後に恒例の講談会
(台風12号の影響で八合目から下山したため)

目次

発刊にあたって 高野律雄 3

第25回府中市生涯学習フェスティバル特別講演

なぜ私は毎年富士山に登り、頂上で講談を語るのか

口絵写真「神田紫富士登山隊」の撮影した写真(行程順)

講師プロフィール 神田 紫 6

1. さて本日のお話は	7
2. 演芸界、講談界のお話	8
寄席でお目にかかります	8
読んで聴かせる講談の味	8
前座から二ツ目、真打までほぼ10年	9
3. 富士山頂上講談のお話	12
富士山との出会いは新幹線	12
“富士山クラブ”で清掃ボランティア	13
一度でいいから登りたい	14
非常階段30階の上り下り	15
一歩足を出せば必ず頂上に立てる	16
ラッキー！初めての富士山頂	17
ブロッケン現象も講談も	19
次は一合目から登るはずが	20
富士山頂の感動、半端じゃない達成感	22
富士山仲間もお客様も私のお友達	22
4. ミニミニ講談教室	23
真田幸村大阪出陣	23
高座で使う小道具三つ	27
武芸物、世話物、時事講談など	28
芸人の命は客次第	28



<講師 神田紫さんのプロフィール>

講談師。日本講談協会 元会長。一般社団法人日本講談普及協会 理事。特定非営利活動法人富士山クラブ 副理事長。東京アナウンス学院講師。公益社団法人落語芸術協会会員。

文学座付属演劇研究所卒業。昭和 54 年 二代目神田山陽に入門。平成元年 真打昇進。

「人、物、自然を大切にし、感謝する心」を伝える環境講談“もったいない善兵衛”を創作し、話題となる。毎日新聞社の MOTTAINAI キャンペーン、富士山再生キャンペーンに参加。昨年の夏で富士山登頂 10 回目を達成し、同時に頂上講談会も開く。

●編集協力＝田頭 隆徳

なぜ私は毎年富士山に登り、頂上で講談を語るのか

～昨年 10 回目の登頂を達成～

講師：講談師 神田 紫

1. さて本日のお話は

(出囃子)

(パンパン——張り扇^{はりおうぎ}の音)皆さま、ようこそのお集まりでございます。ただ今ご紹介いただきました女流講談師の神田紫と申します(パン)。昔から七色の虹は夢の懸け橋だといわれておりますが、その虹の一番内側に控えめにつつましく出るのが紫(パン)、ご存じお醤油も紫、源氏物語も紫、ウニも紫、風呂敷も紫、ぶどうも紫(パン)、私は神田紫(パンパン)。よろしくお付き合いのほどお願い申し上げます。

今日の話の流れを最初に説明させていただきたいと思います。まず私が普段活動しております演芸会、講談界のお話、修業時代のお話をさせていただきます、それから本題のお話をさせていただきます。そして皆さま入場するときには多分お手元に配られたと思うんですけども「ミニミニ講談教室」という原稿がございます。皆さんに今日は講談を体験させていただきたいということで、それを皆さんと一緒にやらせていただきます。そして最後に私の「講談」を一つ聴いていただくという流れでございます。一時間半ございますけれども、途中で休憩は取らないそうでございますので、もし行くべきところに行きたい方はどうぞ速やかにいらっしやいまして、でも必ず帰ってきてくださいね。そのまんま絶対にお家には帰らないように、ほかの場所には行かないようにさせていただきたいと思います。でないとどうなるか(パン)、私は大変まれな体質でございますねえ、先日も怪談会がございまして、怪談話をしておりました。やっぱり皆さんお忙しいですから途中でスーッとお帰りになる方がいらっしやるんですね。会場の中にお戻りくださればそれでいいのでございますけれども、私は貴重な体質を持っておりますので、そういう途中で立った方には、「ウンッ」という気合を入れます。そうするとその方は何ですか、お帰りになる途中で駅の階段から転げ落ちたとか(笑)、自転車に引っ掛けられたとか(笑)、財布をすられたとか(笑)、そういう報告が来ておりますので、ぜひそういうことのないように(笑)お戻りいただきたいと思っております。(途中入場の人々に)いらっしやいませ。お待ちしておりました。席が空いておりますのでどうぞお好き

なところにお座りいただきますようよろしくお願い申し上げます。この会場に時計がございませんので、腕時計をここ(講釈台)に置かせていただきます。

2. 演芸界、講談界のお話

寄席でお目にかかります

まず私は「日本講談協会」というところにおります。関東では芸人さんが所属している協会が二つございます。「落語協会」と「落語芸術協会」、私は落語芸術協会の方に所属しております。会長さんはついこないだお亡くなりになりました、以前『笑点』で司会をしていらっしやいました桂歌丸師匠、この方が会長さんでいらした協会に所属しております。副会長が『笑点』の番組で言うと司会者のすぐ向かって右側に座っていらっしやいます三遊亭小遊三師匠、この方が副会長でございまして、今は会長代行。お亡くなりになる前に具合が悪いから会長さんがそうおっしゃったのでございましょう、小遊三師匠に「会長の代行をするように」ということを言い残してあの世に旅立たれたわけでございます。そして今司会を担当しております春風亭昇太さん、この方はうちの協会の理事でございます。若手の理事でホープでございますが、50歳過ぎてもいまだに嫁の来手のないという(笑)春風亭昇太さんが理事でございます。これは『笑点』をご覧になっている方にできる説明なんでございますけれども、真ん中からちょっと右、三遊亭円楽師匠、この方は円楽党という円楽一門でございまして、つい先ごろ、今年(平成30年)ですか、うちの落語芸術協会に客員としてお入りになりましたので、私たちも時々寄席で一緒に出演することがございます。

私が普段出演しておりますのが「寄席」でございます。寄席はまず浅草演芸ホール、新宿の末広亭、池袋演芸場、国立演芸場、それからお江戸上野広小路亭、お江戸両国亭、そして新宿にございます新宿亭というところに出演しております、多い時で月に20日ぐらい、少ない時でも5日間ぐらいはどこかに出演しているわけでございますけれども、そこで活動しております。私たちが立つ舞台は「高座」と申します。皆さまからいたしますと高いところに座ると書いて高座。

読んで聴かせる講談の味

この「講談」と申しますのは、落語と並び称せられる日本の伝統芸能、話芸でございます。お話をする芸でございますが、落語は座布団の上に座って会話を中心にして話が進んでいきまして最後に「落ち」がある。講談と申しますの

は、もちろん会話が主体に進んでいくのですが、間に説明がございます。状況描写と申しますか、いろんな説明の文章が入ります。最後に落ちはございません。わかりやすく言えば講談師が小説か何かを読んで皆さんに聴いていただいている、皆さんはそれを聴いてその物語の内容をご自分で想像しているようなそういう感じ、とえばわかりやすいかもしれません。そういうものが講談でございます。

講談の中には「講談調子」というメロディーのようなものと、それからリズムがございます。後でやっていただきますのでちょっとはおわかりいただけるかもしれませんが、普段よりも言いたいことを強調して語ったりいたしますので、お喋りの苦手な方も講談をやるようになれば皆さんの前で堂々と語ることができるようになるというのが特徴でございます。私は一般の方にも講談をお教えしております、今申し上げましたお江戸上野広小路亭の上の会議室でもやっておりますし、毎日新聞社さんでも講談教室をやっております。また近頃は私と、ちょっと先輩の神田陽子さんと一緒に「日本講談普及協会」というのを作りましてお子さん方に、特に中心は小学生なんでございますが、無料で講談教室を開いてお教えしております。大人の方にもお教えしておりますので、「ぜひ講談というものを知っていただけて楽しんでいただきたい」と思っております。歌の上手な方はたくさんいらっしゃるんですが、講談ができる方はそうそういらっしゃいません。ですから「今度、趣味を身につける場合はぜひ講談を語っていただきたいなあ」と思っている次第でございます。講談の普及のために今日私はやってまいりました。あっ、そうじゃなくて富士山の話をしなくてはいけないんですが（笑）、それはもちろんでございます。

前座から二ツ目、真打までほぼ 10 年

修業のお話でございますが、まず師匠を訪ねる。この師匠に講談を教えてほしいと思ったときに（コンコン）門をたたきますと、大体入って3か月ぐらいは見習い期間、これは落語も同じでございます。師匠の中にはもっと見習い期間を長くとる方もいらっしゃいますが大体3か月、この間に師匠に当たる方が「この子はまじめに修業をするのかな？」と見ていらっしゃいまして「これなら大丈夫」と思ったときに3か月後、正式な「前座」になります。前に座ると書いて前座と申しますが、その修業期間は大体4年です。これも落語家さんと同じぐらいですね。まじめにやっていたら4年経つと「二ツ目」という次の階級に昇進いたします。漢字の二、片仮名のツ、目玉の目と書いて二ツ目。その次の階級が「真打」でございます。写真の真に打つ、打者の打と書いて真打と申します。よくマスコミの方、雑誌とか新聞なんかには「真打ち」と「ち」と

いう送り仮名が付けてありますが、私たちの業界では「ち」は付けません。本当は付けないのです。一度取材していただいたときに「ち」が付いていたので、「これは私たちの世界では『ち』は付けないんですが」とお話いたしますと、新聞社の方がマスコミでは「ち」を送り仮名に付けないとうちの世界ではダメなんですと逆に教えていただきましたので、そういうときは文字で書くと「真打ち」と「ち」が付いておりますが、私たちの世界では漢字二文字でございます。これはミニ知識でございますが、覚えていただければありがたいなあと思っています。

真打になるには私たちの講談の世界では大体入門してから 10 年ぐらいで真打昇進のお声がかかりますが、落語家さんの方はもっと厳しくて大体普通ですと 15 年ぐらいはかかります。優秀な方は先輩を飛び越えて真打に昇進なさいますが、一番有名だったのは春風亭小朝師匠、あの方は確か何人も先輩を飛び越して真打になられまして大変な人気でございます。

前座修業は大忙し

業界では、前座さんが一番忙しいんですね。楽屋に入りますとすぐに舞台のふき掃除をしたり、楽屋のお掃除をします。それから自分より先輩の方が入っていらっしゃいますと、お茶を出します。真打以上の方の着物の着替えの手伝いをする。こういうことがございます。お茶を出すにも通り一遍ではだめなんですね。「この方は濃いお茶が好き、薄いお茶が好き、白湯しか飲まない、水しか飲まない」ということを先輩から伺いまして、それをメモっておきまして頭にインプットして、その方の好みに合わせてお茶、お水、白湯などを出します。それからですね、私が昔前座修業しておりましたのは上野の広小路にございました「本牧亭」というところだったんですね。畳の席で椅子はございません。舞台が 60～70 cm ぐらい高いところがございます、そこで修業しておりましたが、楽屋が広くて大きな四角いテーブルがございます、座るところが年数によって決まっております。奥にピンクの電話がございました。前座さんは先輩が入ってくるとお茶を出す。電話がかかると受話器を取って、用件を聞いてかかってきた相手に的確に伝える。そうして誰か鼻をかんでいる人がいれば、すっとゴミ箱を前に差し出す。そのゴミは手で触らなくていいんです。ここに捨ててくださいというふうにゴミ箱を差し出します。中にはタバコを吸う方がいらっしゃいます。そういう先輩にはタバコに火をつけることはいたしません。そのかわり灰皿をさっと前に出す。それからまた、「がまぐち」を開けようとする方の前では、さっと手を出す(笑)。これは前座の修業ではございませんけれども、とにかく忙しいんですね。後は「めぐり」と申しまして出演者の名前が

書いてある縦に長い紙、それを出演順に並べて舞台の上に出すとか、後は一人ずつ高座から引っ込む時に、前座さんが出て来て座布団を裏返しにする。こういう用事がございます。

今、私が登場する時に「出囃子」を流していただきましたが、劇場によっては「下座」さんと言って三味線で生演奏してくださる劇場もあるんですが、中にはCDを掛ける劇場もございまして、それも前座さんがやります。覚えた話はですね、お客様の前ではすぐにできないですね。私たちの世界では前座さんのことを、最初の頃の前座さんのことを「空板」と申します。これは講釈台というものが木できておりますからこれを板といたしますと、お客様が一人もいらっしやらない空っぽの席で（パンパン）板をたたきながら今まで師匠から教えていただいたものを語るんですね。一番最初に教えていただいたもの（パン）「さても源左衛門その日の出立ち如何にと見てあれば」（パンパン）、一人でもお客様がいらっしやいますと、「お後と交代をいたします」と言って、引っ込まなくちゃいけないんですね。

こうした前座さんをしばらくやっておりますと、先輩から「今日は師匠に教えてもらった話を全部やってから舞台の袖に下りてきていいよ」と、許可が出る日が来るんですね。そういう時は、本当に張り切ってしまう。もうお客様の前で語りたいために一生懸命修業しているわけですから。お客様がいらっしやいますと、先ほども申し上げましたようにこういう椅子席ではございません。畳の席でございまして座布団がいっぱい余っております。中には壁を背もたれにいたしまして足を投げ出して聞いてくださるお客様がほとんどなんですが、ツカツカツと前にいらっしやいまして、一番前に来て余っている座布団一枚を半折にしてここに横になって寝そべて聴く方がいらっしやるんですね。で、そのうち「グウッ」と寝る方がいらっしやいます。もう何とか自分の大きな声で起こそうといたします。その時には、まだ芸の力が無いのに大きな声で起こそうとします。

（パン）「ぬっくりと（ぬつと）立ち上がったる左衛門丞幸村は（パン）今まで着ていた着類（きもの）を脱ぎ捨て、着込み（護身用）を素早く着用成し」（パーン パンパン）もう張り扇なんかをパンパンたたきます。すると今まで寝そべていた方がむくむくっと起き上って「うるせえなあ、眠れねえじゃねえか、静かにしろい」と叱られてしまいます。これにめげているようでは、この世界ではやっていけませんので、そういうことを言われながらも一生懸命やらせていただいております。

また、こんな間違いもありました。

（パン）「時に本多平八郎、槍に跨り、馬を小脇に掻い込んで」（パパーン パパ

ーン パパーン パンパン) そうするとお客様から指摘されるんですね。「紫ちゃん、細い槍に跨って、どうして馬を搔い込めるんだい。」言われて初めて、「あつ間違えちゃった」と思うんですが、そういう時は、そこから講談を続ければいいんですが、なかなかそういうわけに参りません。また(パン)「もとい」と言って、始めから語らなければ最後まで語りきれないという、まあ、今ですとね、途中で何かがあったとしても続きから語る事ができるんですが、その頃には、そういうこともできませんでした。まあ、そういう失敗をしながら私は、昭和54年に入門いたしまして昭和64年(平成元年)に真打に昇進させていただきました。

今、数えますともう足かけ40年になる。まあ、この間30歳を越えたばかりなのに(笑)という感じでございますけれども、私、うちの師匠の所の門をたたきましたのが3歳の時「わずか3つ」(笑)でございました。まあ、計算が合いませんけれども……そこは聞き流して頂きたいと思います。

3. 富士山頂上講談のお話

富士山との出会いは新幹線

さて、本題の富士山についてでございますが、まず私と富士山との出会い。

これは、さかのぼりますこと小学校5年生の時でした。それは写真とか映像ではなくて、生の富士山を見たのが小学校5年生の時、初めてでございました。私は神戸生まれで関西に住んでおりました。その時、東京に住んでおりました伯母が入院しておりまして具合が悪いというので、一家揃ってお見舞いに新幹線に乗って東京に出てまいりました。その道中で初めて富士山を見たんですね。それが最初でございました。そして帰りにももちろん富士山を見ました。「きれいな山だなあ」という印象でしたので、たぶん、その時は行きも帰りも晴れていて、少し雪をいただいた富士山だったと思います。夏の真っ黒な富士山を見てきれいだとは小学生では思わなかったと思います。そういう、普段皆さんがきれいだと思われるような富士山を小学校5年生の時に初めて見ました。

その後、高校を卒業してから東京の短大に行き、春・夏・冬の長い休みにはやはり新幹線で実家まで往復しておりましたので、何回となくきれいな富士山を見ました。その時にはですね、富士山は、昔は信仰の対象となっていたということなど、まったく知らなかったんですが、なぜかあの美しい富士山を見ると心の中で手を合わせたくくなりました。後で調べて「木花開耶姫このはなさくやひめ」という女性の神様が宿っているということを聞きまして、「ああやっぱり神様が宿っていらっしやっただ」このはなさくやひめというふうに、今では認識しておりますけれども、そのぐ

らいとにかく言葉で言い表すことのできない、感銘を受けました。「ああきれいだなあ、ああ美しいなあ、なんて雄大なのだろう」、見るとほっとするんですね。「日本人に生まれて良かったな、日本にはこういう誇れる富士山というものがある」というふうに、誰にも別に教えられたわけでもない、本を読んだからそう思ったのでもなく自然にそういう気持ちが湧き上がりました。それからは新幹線の車窓から見る富士山が私は大好きになり、必ず見るようにしておりました。

“富士山クラブ、で清掃ボランティア

それから、今年で11回富士山に登りました。さかのぼること12～13年前に、私は、富士山の環境を保全する特定非営利活動をしております“富士山クラブ”という団体に入りました。その前には、「富士山大好き！100人の会」という会がございまして、友人に誘われてそこに入ったのですが、その時に代表となっていたらっしゃいましたのが、元高野連（日本高等学校野球連盟）会長の奥島先生という方と、王貞治さんが筆頭としてお名前が出ておりました。そこで“富士山クラブ”という富士山の環境保全をする団体があるということを知りました。

活動は、富士山に登って、まあ、バスで行ったんでございますけれども、三合目から五合目ぐらいの間、私が行ったのはそこなんです、そこを清掃する。まだいろんなゴミがたくさん残っているからということで、12～13年ぐらい前は、今よりもっとゴミが散乱しておりました。もう産業廃棄物、大きなゴミ、私が目にしたのはどうも冷蔵庫らしい。また何か機械の一部、それからクーラーの室外機のような四角いものも見ましたし、リヤカーのようなものも捨てられていましたし、車のタイヤもたくさん捨てられていました。ちょっとよく覚えてはいないのですが、大きな、本当に大きなゴミがたくさん捨てられていました。それも“富士山クラブ”の方や、いろいろなボランティア活動をする方々が、大分撤去されました。

次に私が行ったときには、まず清掃のときには「軍手」を渡されるんですね。軍手をもって、ほかに用意されていた道具が大きな「スコップ」、それから「トング」、これは、はさんでゴミをとるものですね。後は、分別できる「ビニール袋」、大きいのを何枚かもらいました。そして最後には自分で選ぶんですけど「竹べらもありますから、使ってください」と言われました。「竹べら」というのは、ちょうど直径500円玉くらいでしょうか。500円玉より一回り大きいくらいの竹を縦割りにして、10cmから15cmくらいにした竹べらをですね、これを何に使うかという埋もれているゴミを掘り起こすんですね。見たところは

きれいなのです。でも、「ここを掘り起こしてください」と言われるんですね。

ひたすら下を向いてこう掘り起こしておりました。それで、ぐっと掘り起こすとですね、少し土を掘り起こすとですね、いろんなゴミが出てくるんですね。私がびっくりしましたのが、ビニールがございましてね、ビニールの端がちょっと出ていて、私がなんとかそれを出そうとするんですが、もっと深く埋もれていて、どんどんスコップかなにかで掘ってやっと掘り出すことができたゴミもありました。またF社の、濃い味のジュースがありますね、そういう缶がゴロゴロ出てきたのと、ひとつびっくりしたのが、私も食べたことがあります、I社のハンバーグ、これくらいの半透明の袋があるんですが、私が掘ったところから何十枚も出てきたんです。「ええっ」というくらい掘っても掘ってもハンバーグの袋だらけ。私もI社のハンバーグは好きでした。一つのご家庭で、いくらハンバーグが好きでもあんなには出てこないと思います。一か所に20~30枚、全部で40~50枚くらい出てまいりました。掘っても掘ってもハンバーグの袋、ちょっとぞっとしたくらいでございまして。一つのご家庭の方ではなくて、業者の方が捨てたのではないかと考えております。

とにかくいろんなゴミが出てまいります。電線のようなもの、ぼろぼろになったコードから、普通のペットボトル、布なんかもございまして、人目がなければ、ポンポンポンポン富士山に捨てていたんですね。車が通っている道路のそば、ちょっと脇に入りますとね、林のようなところにもたくさんのゴミが捨てられていました。たばこの吸い殻なんかも道路の脇にたくさん落ちていました。そういうものを拾う清掃活動、ボランティアをしておりました。

一度でいいから登りたい

私は、「富士山クラブ」に入るまでは、自分のことで精一杯だったんです。ボランティア活動のことは知っておりましたが、自分が真打になるまでは、そのことだけに一生懸命でした。小さなお子さんを連れてご家族で清掃されていて、本当に頭が下がる思いでした。今日も会場に来てくださっていますが、本当に皆さん、純粋にボランティア活動、清掃しましょうと集まってくださった方ばかりなんです。私はそれまでたいしたボランティア活動をしたことがございませんでした。で、「とにかくその活動をするために、ここに入ったんだから、一生懸命にやりましょう」と下を向いて、こうゴミをあさっておりました。で、その時に考えたのが、私は富士山に来ている、富士山の大地を踏みしめている、それなのに私は富士山にそれまで一度も登ったことがなかったんですね。まあ、「ゴミを拾って富士山のためになることをしているけれど、富士山に何回か来ているけれど、一度も登ったことがない。これはどういうことだろう」と思い

まして、「せっかく富士山に来ているのだから、日本人に生まれたからには一度でいいから富士山に登りたい」、こう思いました。これがきっかけでした。下ばかり向いていたから、「ちょっと上を見たい」。そう思ったのがまず単純なきっかけでした。

で、私は「富士山クラブ」の方々に聞きました。「30歳ちょっとすぎちゃったんだけど、富士山に登りたいのですが。これからじゃあ、ちょっと無理でしょうね、普段スポーツもしておりませんし。まあ、歩くのは好きですけど、走ったり、山登りなんかは大嫌いなんです。もう、うん十歳になったらもう無理かしら」とお聞きしましたところですね、「富士山クラブ」の今の事務局長の方にですね、「あの、紫さんは歩くのは好きですか、普段よく歩きますか。」そう聞かれました。「私、歩くの大好きなんです。車も持っておりませんので、仕事の合間、あっちに行ったりこっちに行ったりするのに、私歩きます。性格はのんびりなんですけど、とにかく速足で歩くのが好きです。」そう申しました。「じゃあ、大丈夫です。」簡単におっしゃるんですね。「ええっ、本当に大丈夫なんですか、例えば初めて登った高齢の方、どういう方がいらっしゃいましたか。」こう聞きましたら、イグザンプル、例がよかったんですね。私がお聞きしたのが82歳の男性で富士山に初めて登ったと。普通ですと一日で登り下りする方もいらっしゃいますが、「富士山クラブ」で登るときは、八合目くらいで一泊して、夜中に出発して、頂上まで登って御来光、日の出を見る。ですから一泊二日で登り下りするんですが、その方はご高齢ということで二泊三日かけて登って下りられました。「ええっ、本当ですか。でもその人は普段からいろんなスポーツをしていらっしゃるんでしょ。」と聞きましたら「いえいえ、その方は大学の先生で、スポーツなんかほとんどやったことなく、でも富士山に登りたいとおっしゃるので、私たちといっしょに登りました。それが富士山登山初めての経験だ。」ということをお聞きして、(パン)「これだったら大丈夫、私はその方よりもなん十歳も若い。足腰は丈夫なの。」私はその時日本舞踊をやっておりまして、初めて登ったとき、名取になるために訓練をしておりまして。そうとうきびしい踊りの稽古をしておりまして。

非常階段 30 階の上り下り

「もう、今年しかない。富士山に初めて登るのは今年しかない。自分の体力を考えて、今年登りたい。」たしか、そう言ったんですね。その時、事務局長から言われたのが。「[練習登山]に参加してください。2回から3回くらい、富士山に登る前に練習登山に参加すること、それから普段からとにかく歩いてください。例えば駅なんかでは、エレベーター、エスカレーターに乗らないでな

るべく歩いて上り下りをしてください。」昔はジャズダンス、バレエ、劇団にいて女優を目指して踊ったりしていたんです、その時は日本舞踊くらいしかやってなかったんです。スポーツなんかほとんどやっておりませんでした。おまけに登山は大嫌い。なのに、富士山だけは登りたかった。なぜ「登りたい。」と思ったのかは、自分でもよくわかりません。ただ、日本一高いところ、日本一高い山に登りたかったんですね、それだけなんです。いまだに富士山には登っていても、「他の山に登りたい」と思ったことがございません。他の山に登るのは、富士山に登る訓練だと思っております。

そんな感じで、それからは自分なりに訓練をいたしました。家で腹筋をしたり、足の訓練をしたりとか、その時、私の自宅は30階にありました。30階の非常階段を上り下りしました。でも毎日そんなことはやっておりません。ただ、着物を着て仕事から帰ってきて駅の近くのスーパーで、大根とか人参とかジャガイモ、カレーを作ろうと思っいろいろ買って重い物を袋に入れて肩にぶら下げて、自分のバッグもこっちにぶら下げて、仕事が終わったしんどい状態で30階まで上るという訓練をしました。で、何回か上りました。出かける時も上り下り、家から出て来てそれだけはやりました。30階上るためには、その時、計ってみたら12分ぐらいで上るようになりました。でも、急いではおりません。30階まで上れなくなると困るので、とにかくゆっくり、ゆっくり無理しないで上る。また、非常階段でございいますから、どこかの階に住んでいる方が、たまにですけれども、ドアのところには何か物をおいているんですね。そうすると非常階段はドアを開けない限りは風が通らないのでちょっと変な臭いがする時もあるんですが、「訓練、訓練」と思って階段を上り下りしていました。

一歩足を出せば必ず頂上に立てる

いざ10年前に初めて富士山に登りました。

まあなんと富士山に登る時の風の爽やかなこと、登山道は吹きっさらしでございいますから、空気も良いし、天気も良かったんですね。非常階段を上っているときのような変な臭いもしません。だから本当に爽やかに登ることができました。ゆっくり、ゆっくり登って行きました。

私が初めての時には、まず五合目までバスで行って、そこで高度順応のため、ゆっくりと昼食を食べて休憩をして五合目から、ゆっくりゆっくり登って行きます。で、疲れたらちょっとずつ休憩をしながら登って行く。八合目の山小屋に泊まって、夜中に出発して、御来光（日の出）を拝顔するというコースでございました。けれども、とにかく自分にとっては、いくら一生懸命訓練しておりますでも大変でした。正直言って、「ああやっぱりしんどいなあ、でもそれは

覚悟の上」と思い直して登って行きました。

六合目に着きました。次は七合目、(パン)「嬉しい！」と思ったら看板には「六合五勺」って書いてある。六合五勺(六合半)、「ええっ、七合目じゃないの」、六合五勺からまた上に行きました。山小屋のようなものがありました。七合目。「ああ良かった七合目。(パン)次は八合目」と思ってまた七合目から出発しました。八合目と思ったら「七合五勺」、「ええっ、どういうこと、何で」と、本当に思いました。七合五勺が最終だったのか分からないのですが、次に「八合目」とと思ったら今度は、「新七合目」があるんですね。もうやたらあるんです。何とか五勺、新何とかね。旧何とかは無かったかも知れませんが、とにかく六合目から八合目の間にたくさんあるんです。そういう看板が。もうそのたびにがっくりきて、また疲れがどっと出るのですが、リーダーで「富士山クラブ」の男性の方に付いてすぐ後ろを歩いている時に、「紫さんね、一步一步足を前に出せば必ず頂上に着くのだからね。頑張ろうね」と言ってくださいました。私は、「はっ」としました。なるほど一步前に足を出せば、ゆっくりでも何でも、必ず前に進むのだということをその時に知りました。

そういう方の言葉を今、自分の生活にも生かしております。特に仕事の部分ですね。一生懸命練習しても、そんなに「話芸」の力なんかなかなか直ぐ付くわけはございませんので、一步ずつ少しずつです。「そうだ、あの方がおっしゃっていた一步前に、一步前に、一步足を踏み出せば必ずゴールにたどり着く。」それも勉強になりました。それで八合目に泊まりました。

私は「高山病」にもかかりませんでした。結局いまだに高山病にはかからずにすんでいるのですが、登る前に言われていたことは、「高山病にかかった方は下山しなければ治らないので、そこであきらめて下りるという決断をしてください。あとの方は登っていただきます。でも下りる人にも私たちの誰かが付いて一緒に下りますから心配しないでください。」ということで、「富士山クラブ神田紫富士登山隊」は、周りの一緒に登ってくださる皆さま方のおかげで頂上まで行くことができました。

ラッキー！ 初めての富士山頂

そして、頂上に登ってからもやることがたくさんあるんですね。頂上に登って、ああやっと頂上に着いた。鳥居がございます。それをくぐると頂上に着いたということなんですが、そこからもう少し上に本当に一番高いという「剣ヶ峰」という所があるんですね。石碑が立っておりまして、「ここは3,776mの地」と刻まれております。そこで皆、記念撮影をする。その前に最初に着いた頂上から「御来光」(日の出)を見る。「富士山のお鉢巡り」といって火口を巡るこ

とと、あと郵便局にも行かなくちゃいけない。ここから自分の知り合いに、「今日頂上まで登れました、大成功！」とハガキも送らなきゃいけないし、私は登る時に自分で決めておりましたが、「自分が山頂まで登れた暁には、頂上で講談を語りたい」と言ったんですね。なぜかという、私は講談師です。自分の足跡を残したい。で、こう言ったのです。「頂上に登れた時に語ります。」

今まで私の業界では講談師が何人も、富士山の頂上まで登っております。しかし、頂上に登っているにもかかわらず、誰一人として講談を語った人はおりません。そこで私は（パン）「しめた」と思いました。「私が先陣を切って富士山の頂上で講談を語るんだ。富士山の頂上から講談を皆さんに広めたい、発信したい」という思いがありました。そういう夢も持って登りました。

まず、私が1年目で本当に「ラッキーだったな」と思うのは、一緒に登ってくださった年配のご婦人方が、御来光を見た時に、「こーんなにきれいな御来光は、私は今まで何度も見ているけれども初めてだ」って、おっしゃったんですね。私は、「ああそうなのか」と本当に嬉しく思いました。

どういう御来光だったかと申しますと、日の出、雲海がございます。真っ白な雲の雲海がございます。それで、皆さまよくご存知の葛飾北斎が描いた『かながわおきなみうら神奈川沖浪裏』という浮世絵がございます。そういう名前の遠くの方に富士山が見えて、手前の方に細長い舟が浮かんでいて、左の波が「ざあつ」とおおいかぶさるように曲がった絵で、右側にもちょっと波があるんですが、有名な作品がございます。何となく分かっただけですか。それが1年目に頂上に登った時、逆だったんです。雲が右側にこういうふう、『神奈川沖浪裏』とは反対に入道雲のように出ておまして、ここに雲海があって、で、ここに「ぽっと」太陽が出るんですが、まあその日の出のきれいなこと。ぽっと出た時にはオレンジ色だったんですね。係りの皆さんが身に着けているビブス（スタッフベスト）のオレンジ色よりももっと濃いオレンジ。その時に思ったのが、何年か前に九州に行った時に朝ごはんで出た、生卵の黄身と思ったんですね。きれいなオレンジ、濃いオレンジで本当にその卵、美味しかったです。上等なニワトリが産み落としたばかりの卵という感じで、色もそっくり同じ、本当にきれいでした。

それがだんだん昇って行く、だんだん周りが朱色に染まっていく、その美しいこと。もう一つびっくりしたのは、一緒に登っている方が御来光を見る時の凄い人数、大勢いらっしゃるんです。私は頂上ではもう少し人数が、登れた方が少ないのかと思ったら、まあ、まるで原宿の竹下通りのよう。あそこは狭いし、頂上はもっと広いんですけども、本当に混んでいるんですね。何にも建物がなくて、ちょっと土が盛り上がった所も全部人、人、人、人。そして携帯

で写メール、またカメラを持った方もご自分を、日の出をバックに写す方がいらっしやいました。富士山の頂上で携帯が通じるというのも、私びっくりしたことなんでございます。何にも知らないで行ったものですからね。

ブロッケン現象も講談も

とにかく美しい御来光に感激しました。その後、剣ヶ峰で写真も撮りました。あとやるべき事は「お鉢巡り」と言って、火口の周りを早い方で1時間、私は1時間半かけて回りました。回っている途中で「影富士」という現象が見えました。

もう一つ何を体験したかという、「ブロッケン現象」というものを見ました。それは、蜃気楼のような投影です。向こうで富士山に登っている人に手を振ると向こうも手を振る。それは自分の影が写っているんですね。「ブロッケン現象が見えた。」と誰かが叫んだ時、「えっ、どこ？ なに？」ブロッケン現象という言葉も初めて聞きました。人影が見えてから2、3秒で消えるのだそうで、ああもう見えないのかなと思っておりましたら、ちゃんと私も見る事ができました。手を振ったら向こうも振っておいりました。それも見る事ができました。頂上で体験するべきこと、郵便局にも行ってハガキを友達に出すこともやりました。全部1回目ですます事ができたんです。一緒に登った方のお話ですと、「何年か前に登った時は曇りで、御来光を見る事ができなかつた。」とか、「お天気が悪くて寒くて途中で下りた。」とか、そういうことも何回も体験していらっしやると言うのですが、私は1年目で全部、その良い状態をすべて経験したので、もう嬉しくてしょうがありませんでした。

下りる時も順調でした。無事に登って無事に下りて、おまけに講談も語って帰る事ができたんですが、「富士山クラブ」の事務局長さんがその時から、富士山にまつわる講談を書いてくださるようになりました。「大体10分ぐらいでいいです」っていうところを12～13分ぐらい書いてくださいました。もちろん、本を見ながらの「読み講談」でございますが。まわりには、一緒に登ってくださった方の他に、全然知らないおじさんがもう疲れ果てて寝そべっていらっしやる。でも、そこでやるので、「すみません、ちょっと、お耳うるさいかも知れませんが、講談をここで語らせていただきますので、すみません。」と言って始めたんですが、終わった途端に、そのおじさんが（パチパチパチ——拍手）「良かった～アンコール！」（笑）とおっしゃったんです。

アンコール！ どういうことかと申しますと、3,776mの高所は空気が薄く気圧が低いんです。でも私はプロですから、ちっちゃい声で講談をやりたくない、全エネルギーを使って演じたい。そこで私は決められた講談を語りました。も

う力がありません。読み終わった途端にちょっと「フーッ」となりました。目がくらみました。本当にちょっとフーッとなりました。「ああ、でも終わった。後は下りれば良いんだ。」と一瞬思った時に（パチパチ）「アンコール！」と声がかかったんです。

私も「芸人」です。芸人魂がむくむくと湧き上がりまして、「わかりました。では、ちょっと短い赤穂義士討ち入りの触^{さわ}りを申し上げます。」と言って、（パン）語りました。いいところで、まだ続くんですが、原稿にすると4枚あったんですが、1頁の8割ぐらいで終わりました。（パン）「ここからますます面白くなるころではございますが、（パン）この続きはまた次の機会に」と言って、また「拍手喝采」をいただきまして、事なきを得たというわけでございますが、もうへろへろでございました。

皆さんから「あんな空気の薄い所でよくしゃべれるね」と、感心されておりますが、まあなぜか私も登る時に、その語るエネルギーだけは残して登っておりますので、無事に今まですませることができました。

次は一合目から登るはずが

私は2年目に何を考えたかという、1年目は五合目から登って、ちゃんと講談を語って下りてくることができたのだから、「2年目は一合目から登りたい。」と思ったんです。

で、「一合目」から登りました。自分は一合目と思っていたのですが、後でよく考えると、今は「富士山駅」という名前になっておりますが、当時の「富士吉田駅」から出発したんですね。で、大変な行程だからというので、前の日に近くのホテルに泊まって登ったわけでございますけれども、なかなか草深い所に着かないんですね。駅から出発してコンクリートの道を通って、自分の記憶では3時間半ぐらい歩きました。やっと草深い所に入りました。「もう、四合目まで来たんじゃないかな」と思って、「ほっ」とする間もなく、横に長い木札があって書いてありました。「一合目」（笑）「ええっ」、いやもう漫画かと思いました。ここが一合目。私、ここから登ればよかったの、今まで3時間半なんか歩きたくなかったの、ここまでタクシーでもバスにでも乗ってきてもよかった。なんで3時間半も歩いてきたんだろう。それはね、知らなかったからなんですね（笑）。ちゃんと打合せしなかったから、私、大ざっぱな人間でございますから、ちゃんと細かく打合せしなかったために駅から歩くはめになって、そこで皆と一緒に出発して一合目の前に3時間半歩いてきて、「一合目」という札を見た時には私、卒倒しそうになりました。これは正直、そこから引き返そうかと思いましたがけれども、ちっちゃい看板が付いていたんですね。「神田紫と一緒に

富士山に登ろう ツアー」。毎日新聞にも載せていただきました。それで皆さん一緒に登ってくださる方を募っていただきました。“富士山クラブ”でもネットでちゃんと皆さんに声をかけていただきました。私の名前が出ている限りは、私が「ごめんなさい」というわけにはいかないと思ひまして、いやあ、大変でした2年目は。

でも、一合目の前から登ったから、その時もきれいな御来光を拝顔して、力を振り絞って講談を語って下りてまいりました。下山して最後に入る温泉と宴会が楽しみでございますけれども。ええ、もう2年目で一合目の前から登ったから、3年目からは五合目からしか登っておりません。もうそれで十分、一回体験したら十分だと思います。その前から、田子の浦辺りのもっともっと何キロも下の方から登る方もいらっしゃるんですが、もう私はそれで十分だと思ひまして、それからはずっと今年まで、五合目から登っております。

今年は、2日目に、頂上に登るため夜中に出るところを台風(12号)が来ましたので、断念してそこから下りました。ハイ、八合目から、雨と風が来ておりました。でも、台風と言うほどのものではなかったですね。ちょっと強めの風と雨ぐらいで、まあゆっくり無事に下りました。

それで、下の温泉に入った後にですね、そこで講談を語らせていただきました。それも毎日新聞さんに載せていただきまして、毎年ですね、一緒に登って講談をやった後に、必ず毎日新聞さんが夕刊に記事を書いてくださいます。登ったその時にパソコンで記事を送ってくださって、その日の夕刊に載せてくださるんですね、もう本当にありがたいことでございます。

私と一緒に登った方で、前の方で講談を聴いてくださった方は、必ず後頭部が毎日新聞の夕刊に載るといふ(笑)、良い特典がございます(笑)。良いんだか悪いんだかよく分かりませんが、まあ今年はそういう状況でございました。

また、3.11 東日本大震災の年は、頂上には登ったのですが、風が強くてかなり寒く霧が濃かったので、頂上では語らずに下りる途中、八合目の山小屋で講談を語りました。それも記事にさせていただきました。ですから私が頂上で講談を語ったのは、まだ9回しかないんですね。そこで私は、「必ず10回は何としても頂上で語りたい」と思っておりますので、来年(2019年)も登ります。「皆さん一緒に登っていただけませんか?」……(拍手) ああ、ありがとうございます。ぜひ登ってください。“富士山クラブ”さんにお申し込みいただければ、後は全部細かいことまでやってくださいますので、そちらの方をお願いいたします。

富士山頂の感動、半端じゃない達成感

とにかく、私がなぜ富士山に登るのか。それは「日本一高い山に一度でいいから登って見たかったから」、まずそれ。後はですね、スポーツというのが苦手でございます。だけど自分が一生懸命足の訓練か何かをして登れた時、成功した時の「達成感」。もうこれは半端じゃございません。こんなに嬉しい！ものなのか、この達成感を味わえたことが私には一番の収穫でした。もちろんいろいろな景色を見たこともそうですが、その達成感を得たいがために私は毎年登っております。

そのためには、山登りは嫌いなのですが、富士山に登りたいために、他の山で練習登山があるというに登ります。それは、今でも山登りは本当は好きじゃないんですね。だから「この山の、こういうお花がきれいですよ。」と楽しみながら登って行く方とは、ちょっと違うんですね。私にとってスポーツなんです。富士山を登るというスポーツなんです、私の中では。で、その達成感を得るということと、富士山を登るという、自分の苦手なスポーツ、を克服できるなら「他の山登りも、じゃあ、たぶんできるだろう。」ということで、自分の中では苦手を克服できたということが大きいんですね。その達成感、成功感を味わいたがために毎年、毎年登っています。そしてご一緒してくださる皆さま方と登れた時には「連帯感、一体感」が生まれるんですね。その時初めて登った方でも一緒に一泊して、余り口をきかない方もいらっしゃいますけれども、下りてきて開く宴会の席では、ちょっと会話をいたします。「また来年登ります」と言うと、「じゃ私も僕も登ります」と言ってくれる方とか、「まあ来年は、登りません」と言う方もいらっしゃいますけれども、その後に講談の会に来ていただいたりしますし、いろいろな方からいろいろなお話を聞くことができます。

富士山仲間もお客様も私のお友達

私は正直言ってちょっと寂しいんですが、友達が少ないんです。ずっとお芝居の世界、舞台女優を目指していたのと、講談の世界にいたので同業者はちょっと、友達とは言えないんですね。やっぱりどこかライバル意識があるから、もちろんお互いに助け合ってやっていますけれども、それ以外の友人というと短大時代の友達、高校は卒業してから何十年も経つからもう音信不通になってしまいましたので、富士山に登るこの登山仲間、それからボランティア清掃活動をする「富士山クラブ」の皆さん、また、その時に1回でも知り合った方々が、私にとってはもうお友達なのです。「お友達！」私は今日、皆さまの前でこうやって高い所でお話しさせていただいておりますけれども、皆さんはもう今日からお友達です。友達の少ない私にとっては、皆さんがお友達なんです。

で、私の中のお友達の定義に、「困っているお友達は助けてあげましょう」というキャッチフレーズがございます。ということは、私が都内または近くで、近くでなくても皆さま方が出先で、「神田紫が出演している」と見たり聞いたり知った時は、見に来ていただきたいんです。お客様が必要なんです。ぜひ講談の方も、今日から皆さまとお友達ですから、「やあ、紫ちゃん、府中で聞いたよ」。というふうに手を振って、声を掛けていただきたいんです。そうすると私が、「ああそうですか、ありがとう」(笑)と返事をいたしますので、ぜひよろしくお願いをしたいと思います。

テーマに沿ったお話はこれぐらいでよろしいでしょうか。なぜ講談を語るのかは、私は富士山の頂上から、頂上でなくても、もちろん下界でもそうですが、講談を広く皆さまに知っていただきたい、普及したい。それには皆さんの口から、何かあれば、「あの富士山の頂上で講談をやっている講談師、ばかみたいな講談師、紫というのがいるよ」と話題に載せていただきたいんです。毎日新聞さんも書いてくださいますので、それでちょっとでも広がれば、「講談という世界が、そういうものがあるのだ」と皆さまの頭の中にとどめていただければ、それでありがたいと思っております。

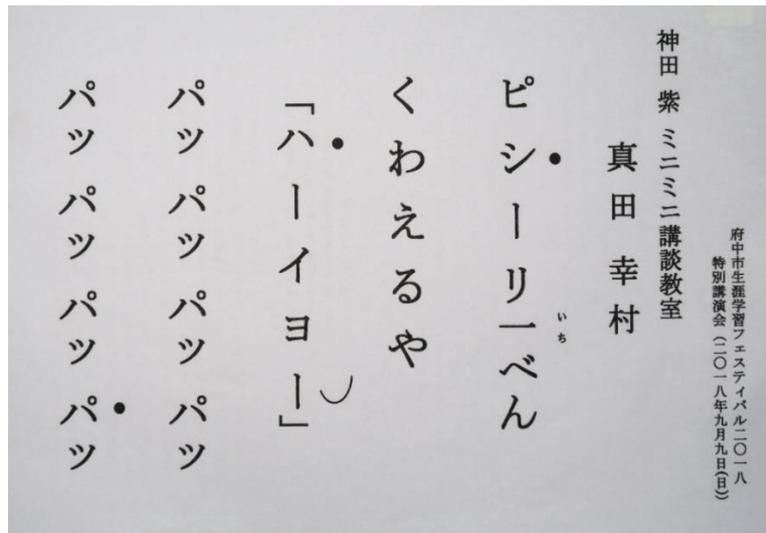
自分が「まだまだ達成感を味わいたいと思う限りは富士山に登りたい」と思っております。ただ私は怠け者なので「何回まで登るまではやります」とは言いません。そんなおこがましいことは言えません。まあ、しばらくは登るだろうと思っておりますので、ぜひ、今日、会場においでの方々の中で、「私、登ったことがない」という方、ゆっくり登ります、ゆっくり登ります。一緒に登ってみませんか。中には、何回も富士山を登り下りしていらっしゃる登山に関してベテランの方が何人も付いてくださって、安心して任せることができますので、ぜひ一緒に登ってみてください。よろしくお願いたします。

では、テーマに沿ったお話はこれぐらいにさせていただきます、皆さまに「講談」というものをもっと知っていただきたい。「講談は聴くのも楽しいんですが自分で語るともっと楽しい」ということを体験していただくために、この原稿「ミニミニ講談教室」を出していただきたいと思っております。

4. ミニミニ講談教室

真田幸村大阪出陣

これは、「真田幸村大阪出陣」の一節です。ほんの一節なんですね。まず、私がやってみますので聴いてください。短いです。



(パン) 『ピシーリーべん くわえるや 「ハ・イヨー」 パッ パッ パッ
 パッ パッ パッ パッ パッ』 (パパーン パパーン パパーン パンパン) 私が
 語りますところなんです、この「ピシーリ」の〔シ〕の右に黒丸がついてい
 ます。「ハ・イヨー」の〔ハ〕にも黒丸が付いています。ヨーと、のぼした棒〔一〕
 のところに「チョン」という印がしてあります。

これ「ピシーリ」の〔シ〕が強い、「ハ・イヨー」の〔ハ〕が強い、強く語る
 ということです。「ハ・イヨー」の長音〔一〕に右上がりの「チョン」とマーク
 が付いているのは、語尾を上げるということです。

そして、これを解説いたしますと、この「ピシーリーべん くわえるや」は、
 真田幸村が今、馬の上に乗っております。これから大阪に出陣します。馬のお
 尻にピシーリーべん、一つ鞭を入れましたということです。べんの「べん」
 は、ひらがなで書いてありますが、これは「鞭」という漢字を書きます。です
 から真田幸村が、自分が乗っている馬のお尻に一つ鞭を入れた、一つお尻をた
 たいたということです。だから、くわえるやは、鞭をくわえた、鞭を入れたと
 言うことです。

そして、「ハ・イヨー」というのは、幸村が今乗っている馬に、さあ、これか
 ら大阪に出陣するぞ、お前も用意はいいか、気持ちの用意はいいかと言って、
 掛け声ですね。馬に対して掛け声をかけているんです。そして講談というのは
 語りですべてを、表現いたしますから、「パッ パッ パッ パッ」というのは、
 馬の足音でございます。

一番最初に私達は、この「張り扇」を使って、(パン) お話をします。左手で
 高座用の「お扇子」を使いますが、皆さんはお持ちじゃございませんので、右
 利きの方は右手で、左利きの方は左手でご自分の太腿、または椅子のちょうど

腕を置く所をたたいていただきたいと思います。まあ、ご自分の太腿をたたいていただくと一番いいと思いますが、決して隣の方の太腿は（笑）たたかないようにお願いいたします。

あ、皆さんの席には、台が付いているんですね。これはいいですね、あ、ここは、いい会場ですねえ。台があるって知らなかったもんですから、今、折りたたんである台を出していただいて、（ポンポン）と手でたたいていただければ一番いいですね。

まず、「ピシーリ」のピを語る前に、（ポン）とひとつ手でたたきます。まずそれをやってみてください。私がたたいたらたたいてください。

（パン）はい、せえの（ポン）。

（パン）そして最後「パッパッパッパッ」って全部言った後には五つたたいていただくんですが、まず今一つたたいていただきました。じゃ今度は二つの練習をします。二つも三つもたたくところはありません、四つもありますが、たたく練習です。今、一つたたいていただきました。二つたたきます（パン パン）、ポン ポンです。はい、せえの（ポン ポン）次は三つです（パーン パン パン）パーン ポン ポンです。三つ目を強く、ですからこうです。（パーン ポン ポン）ちょっと強くたたくと手が痛いですがけれども、軽くていいですからお願いします。せえの（パーン パンパン）そうです。で、四つはありません。

これを語ったあとに五つたたいていただきたいのですが、五つは（パーン パーン パーン パンパン）ちょっと分かりにくいので、張り扇を使わせていただきますと（パーン パーン パーン パンパン）一、二、三 四、五の三の次に、ちょっと間をあけます（パーン パーン パーン パンパン）五つ目を強くたたくんです。でも手が痛いですから強くたたかなくて結構です。リズムだけ一、二、三、四、五とたたいてください。じゃ五つやります。

せえの（パーン パーン パーン パンパン）そうです、そうです。そのリズムです。

はい、まず、一行ずつ行きます。[シ]を強く「ピシーリーベン くわえるや」、二行やりました。せえの「ピシーリーベン くわえるや」そうです。皆さん周りの方の声も聞きながら、なるべく声を合わせるようにしてください。

大勢さんなのでゆっくり行きます。次は「ハイヨー」です。ちょっとこっちを見ていただきますか「ハイヨー」[一]を上げます。せえの「ハイヨー」そうです。

次は馬の足音なんですが、これを同じ強さでやるとつまらないです。最後のパは強くなんですが「パッ パッ パッ パッ パッ パッ パッ パッ」（同じ音階）じゃつまらないんです。それを、ちっちゃい声からだんだん大きくするんです。

「パッパッパッパッパッパッパッパッ」こうなります。(小さい声から大きな声で) 小さい声から大きくしていきます。せえの「パッパッパッパッパッパッパッパッ」(パチパチパチ) お上手。これだけ大勢さんがいらっしゃると必ずどなたかが最後にパが残って馬から落こっちゃった(笑) 感じがするんですが、皆さんは、落こちなかったですねえ、お見事でございます。

じゃあ、全部続けてやりますが、まず私がやりますので聞いてください。頭に一つ最後に五つです。もう一回語ります、ゆっくりのスピードで行きます。皆さんとそろって語るにはゆっくりです。(パン)『ピシーリ ーべん くわえるや「ハイヨー」パッパッパッパッパッパッパッパッ』(パーン パーン パーン パンパン) こうなります。

じゃあ、いきます。(ポン) ピシーリですね。せえの(ポン)『ピシーリ ーべん くわえるや「ハイヨー」パッパッパッパッパッパッパッパッ』(パーン パーン パーン パンパン) ああ、合いましたね。途中で「パ」と言う声が2人ぐらい聞こえましたが(笑) このたたくのと同時に消えてしまいました。

じゃあ、もう一回やりたいんですが、もう一つ、皆さんお上手にできたので細かく言うと「ハイヨー」と上げたら「ストーン」と落とします。ストーンと落とすとなかなか声が出ないんですが、出なくていいんです。パと言う口の形をしていただくだけで、だんだん声が出ればいいんです。こうなります。「ハイヨー」「パッパッパッパッパッパッパッパッ」最初は小さい声からだんだん大きな声に、二つ目か三つ目くらいでやると声が出ますので、それで充分なんです。だんだん大きくして上げる。で、最後に五つたたくと言うことで、やってみてください。頭から行きます。

せえの『ピシーリーべん くわえるや「ハイヨー」パッパッパッパッパッパッパッパッ』(パーン パーン パーン パンパン) ああ、ちょっと落こちる方が(笑) いらっしゃいましたね。今、ちょっと、馬の^{あぶみ}鐙の所に足がひっかかっているような感じがしましたが、お上手です。

じゃあ、最後にもう一回だけ合唱して、あとこれ皆さんたった一枚ですから、ポケットとかバッグに入れて、それでいろんな方の前で語ってみてください。こんな五行だけでも高く語る所、ストーンと落とす所、全部講談の技術が凝縮されて入っております。これだけでも普通の人だったら、ただだらだらと『ピシーリーべん くわえるや「ハイヨー」パッパッパッパッパッパッパッパッ』とこんな感じなんですね。だけど今、皆さんにうまく聞こえる方法をお教えしたのでその通りにやっていただきたいのです。これ一枚ですから、最後に五つ「パーン パーン パーン パンパン」聞いている方が、この後どうなるんだろうと思った頃に、「ここからがますます面白くなる所ではございますが、こ

こういう形にして、(扇子をほんのちょっとだけ開いて)「お銚子」、こう入れて一回立てて、その後はこうやって置く、演技をする時に使ったりします。まあ、こういう「三点セット」を使って、お話をいたしますが…… (パン)

武芸物、世話物、時事講談など

さて、講談と一口に申しましても、いろいろな種類のお話がございます。まず戦^{いくさ}もの、「軍談」でございます。中には、(パン) 何が何して何とやら、(パンパン) 何が何して何とやら、(パンパン) 何が何して何とやら (パンパン)。こういう調子がベースに流れております。「軍談物」と言って合戦の模様を語ったもの、それは言葉が難しいんですが、そういう、今みたいなベースの調子、それをメロディーのようなものとして、楽しむ方もいらっしゃいます。「言葉は難しいんだけど調子が好きだ」という方がいらっしゃいます。昔は武芸者を尊重しておりましたので、「武芸物」と言いまして、そういうお話がたくさんございます。一番難しいのが「世話物」でございます。落語の方では、熊さん・八つつあんなんかが出てくる、一般市民が出てくるようなお話もございます。あと他には「時事講談」と申しまして、新聞の記事の内容をそのまま講談調で読んだりすることもございます。また、後ろに金襖^{きんぶすま}を置いて「出世物語」などを語ることもございます。いろいろな種類がございます。

芸人の命はお客様次第

(パン) さてこれから一つ短いお話を聞いていただきますが、(パン) だいぶ私のお話も長くなってまいりましたので、皆さまの中で時々 (こっくりをゼスチャー) という方をお見受けすることがございます。私、目がいいものですから、ここからすべて見ることができます、目鼻立ちまで。今日、皆さまのこの体勢ですね、私に向けられている目、意識、これをきっちりしていただきたいのです。私たちの世界にはこういう言葉がございます。

(パン) 「芸人殺すに刃物はいらぬ、あくび三つで即死する」。即死する、あのね、三人あくびしている方を見ると、私ここで即死してしまいます。(笑) ということは、「本日の神田紫の命は、今日おいでの皆さんの手にゆだねられている」ということだけ頭の隅において、最後までお付き合いを願っておきます。あとたった10分たらずでございますが、「金襖物^{きんぶすまもの}」でお付き合いを願います。

[以下 『井伊直人出世物語』(いいなおと しゅっせものがたり) の一席を演じて終演] (大きな拍手!)

ふちゅうカレッジ講座記録シリーズ

第25回府中市生涯学習フェスティバル特別講演会

**なぜ私は毎年富士山に登り、頂上で講談
を語るのか** ～昨年10回目の登頂を達成～

発行 2019(平成31)年3月31日

講演 神田 紫

編集 府中市生涯学習ボランティア「悠学の会」
講座記録グループ

井戸 久和 太田由美子 小笠原道雄
坂倉 敬子 新谷 一視 松田 隆夫
渡辺 志郎

印刷・製本 アイ・スィー・アイ・渡辺印刷

発行所 府中市文化スポーツ部 文化生涯学習課
ふちゅう生涯学習センター共同事業体
〒183-0001 府中市浅間町1の7
府中市生涯学習センター
電話 042-336-5700